

島を連ねて橋を架け、急峻な溪谷にダムを造るなど、人間は常に自然に対し挑戦を繰り返し、自然をいかに利用するかを試みている。

土木技術は、この人間の果しない欲求が最も顕著にあらわれている科学技術の一つであり、技術の活用において自然界の条件を最も鋭敏に感じるとともに、自然の造形および人間社会の環境を改造する力を最も強く有している技術の分野であると思う。

したがって、われわれ土木技術者は、壮大な自然に対してはその一部に過ぎない人間社会をいかに自然に調和させるか、すなわち、自然を理解したうえで人間をいかに自然から保護し、また自然を人間による破壊からいかに保護するかを常に主要な課題として心がけなければならないであろう。

現在の首都、京阪神はもちろん、地方の各都市の繁栄は土木技術に負うところが大きく、今後、日本全国の国土改造を目的とする新しい全国総合開発計画の展開も、土木技術の活用いかににかかっているといても過言ではあるまい。

しかし、すでに繁栄の裏に発生し社会問題となっている大都市における都市問題、工業地帯における産業公害による人工災害やレジャーブームに便乗した無秩序な観光開発による自然美の破壊も、土木技術の活用に対しての厳しい警告であり、大いに反省を促すものである。

ここ瀬戸内海地方においても、第一次産業の開発は鈍化し、次第に第二次産業に重点が移行しつつある段階において、特に太平洋ベルト地帯として日本有数のすぐれた立地条件を有する工業地帯として脚光を浴び、活発な産業活動を展開しつつある。

しかし、このような瀬戸内沿岸の発展も必ずしも均衡あるものではなく、沿岸にならぶ多くの都市地区は阪神への依存において成立してきたため、既成工業地帯と個別的に結びつき、各地区間での機能分担が十分に行なわれていないようである。

また、各地区のおかれている自然的、社会的条件の理解にやや欠ける点もあって、おのおのが同じように鉄鋼、石油等の基盤産業の集中を計画し、次々と大工場群を誘致し、浅海を埋立て、大規模な臨海工業地帯の建設、および傾斜地を利用した住宅団地の造成を急速に進めている。

しかし、これらの自然に対する開発は、地区住民の協力を全面的に得るほど完璧なものではなく、すでに一部では住民の福祉向上を制止する現象が生じている。

振り返ってみるに、瀬戸内海がわが国の歴史を通じて交通路として果してきた役割は大きく、その沿岸では平穏な海面、発達した入江を利用して、交通の要衝としての港町が育成され、温和な自然条件のもとに多くの城下町、商業都市が発展してきた。

しかし、平野に乏しく、しかもそれが小規模に分散しているため、古代より山地が農林業を主とする生産のための広い舞台になり、戦国時代の末頃には、かなり小さい島にまで農民が定着し、小さな入江の奥まで埋立て、開田が行なわれるなど未熟ではあるが、土木技術を駆使して小規模な自然改造の努力が続けられていた。

しかしながら、明治以降からの工業化の歴史において、国鉄山陽線、国道2号線および内海航路の整備の進展に伴い、若干第二次産業の発展が見られたものの、豊かな平地と河川に恵まれた京浜、中京、阪神地区および動力資源等の立地条件に恵まれた北九州地区におけるような大規模かつ急速な進展は期待できなかった。

このことが、かえって現在瀬戸内海特有の多島景観を中心とした美しい自然をわれわれに遺してくれたものと思われる。

このような時期において、この貴重な遺産を乱すことなくさらに後世へと引き継がなければならない使命をこの地方の住民、特にわれわれ土木技術者は有しているものと瀬戸内の風景を見るにつけその責任を感じる次第である。

現在の産業界の要請と土木技術の発達により、自然の景観は急テンポで改造され、新しい人工的な景観が創造されつつある。

しかし、ともすると景観の不調和、および改造によって派生的に生ずる人間社会への弊害は必ずしも十分に除去されているとは限らず、自然改造を余儀なくされているわれわれ土木技術者は、この点を十分に認識し、反省しなければならないであろう。

今後、われわれはすでに生じているこれらの多くの弊害の除去に努めるとともに、自然を愛し、保護し、自然の恩恵からわれわれを隔離することのないよう自然改造に取り組むよう留意すべきである。

* 正会員 建設省中国地方建設局長